第3章

扇状地を巧みに利用した 生活・生業空間

第1節 町場・農村の土地利用の 変遷と現在

1. はじめに

勝沼地域は、町場的な性格をもったエリアと農村的な性格をもったエリアが極めて近接して存在することが特筆される。両者は、行政区画の変遷や地域の中心的な産業の遷り変わりのなかで、その関係性を変化させながらも、いずれの時代においてもそれぞれが機能を補完し合いながら地域を支えてきたといえる。

こうしたエリアの関係性は、地形構造とあわせて考えることでより鮮明にみえてくる。

そこで、本節では、論の端緒として土地利用とも結びついた勝沼地域の地形特性を整理したうえで、より仔細な空間構造、あるいは土地利用のあり方を考えていきたい。

2. 地形特性

まず、地域全体の地形的な特性を把握する。

図1は、勝沼地域の地形起伏を表現した立体赤色地図¹⁾に現在の道路などの基礎的な情報を重ね合わせたものである。また、図2は標高の分布を色別に図示した色別標高図である。さらに、図3は東西方向(甲州街道沿い)と南北方向(3地点)の地形断面図である。

こうした資料より、勝沼地域の東西方向及び南 北方向の地形特性を以下のとおり整理できる。

勝沼地域は東側の山地が広がり、地質的な特徴と浸食・運搬作用によって複数の谷が形成されている (第1章参照)。そうした影響は、山地の西側においてもみられ、特に南北方向の微地形は複

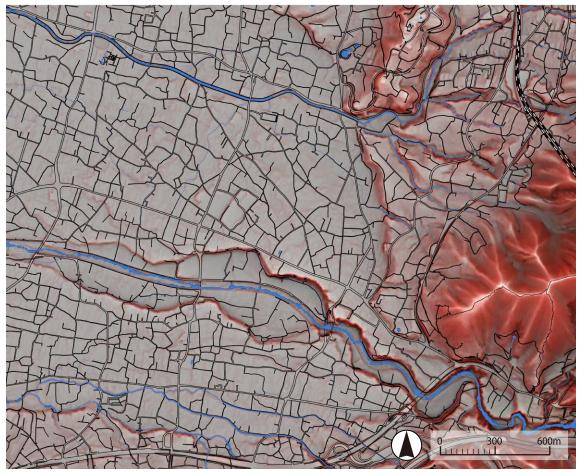


図1 勝沼地域の微地形

雑である。

南北方向については以下のような特徴が指摘で きる。

- ・日川上流部方向(図3 A A')では下流部方向より段丘崖の高低差が大きい(図3 C C' 以西では段丘は確認できない)。
- ・日川北側では、山間部である図3 A A'以外では、甲州街道を頂部として田草川(北)に向かって緩やかに下っている。そして、上流方向(図3 B B')のほうが図3 C C'よりも急傾斜である。
- ・日川南側では、田草川(南)を境に勾配を急にしている。

東西方向の勾配については、緩やかに下る扇状 地由来の傾斜であり、勝沼氏館跡付近を中心に北 西方面に扇状に展開している。

こうした微地形のなかで、集落や畑地が形成されており、それらは営まれる生活・生業にも影響を与えている。

3. 街区構造

前述の地形的特徴のなかで、本報告書が対象とする勝沼地域の各地区が形成されている。調査対象地域は、勝沼、岩崎、菱山の3地区に大別される。勝沼及び菱山は日川北部に、岩崎は日川南部に位置し²⁾、歴史的背景とも関連して、空間構造も大きく異なっている。そこで、歴史的背景と空間構造のかかわりについて、地区ごとに検討する。

(1) 勝沼(河岸段丘下を除く)

勝沼は町場的性格を強く有するエリアである。 戦国時代には河岸段丘上で、盆地方向を俯瞰できる場所に勝沼氏の館が設けられた。また、近世に はすでに指摘したとおり、段丘上の尾根筋を甲州 街道が通り、街道随一の規模を誇った勝沼宿が設 置されている。また、近代になると甲州街道筋は 商業町へと変化し、昭和には観光地化も進んだ。 街路はこうした時代の変化の積み重ねを反映した ものとして理解できる。

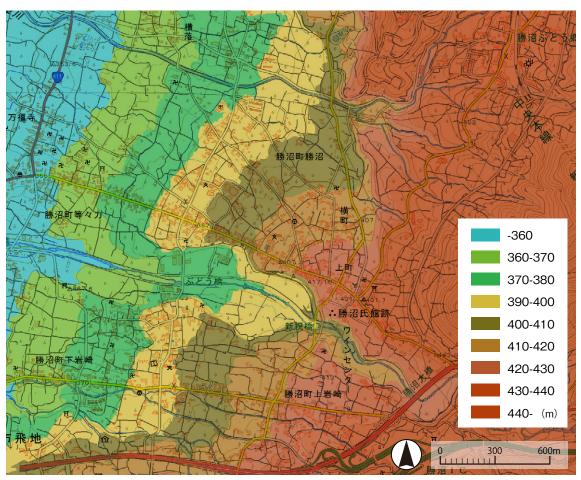


図2 勝沼地域の色別標高図

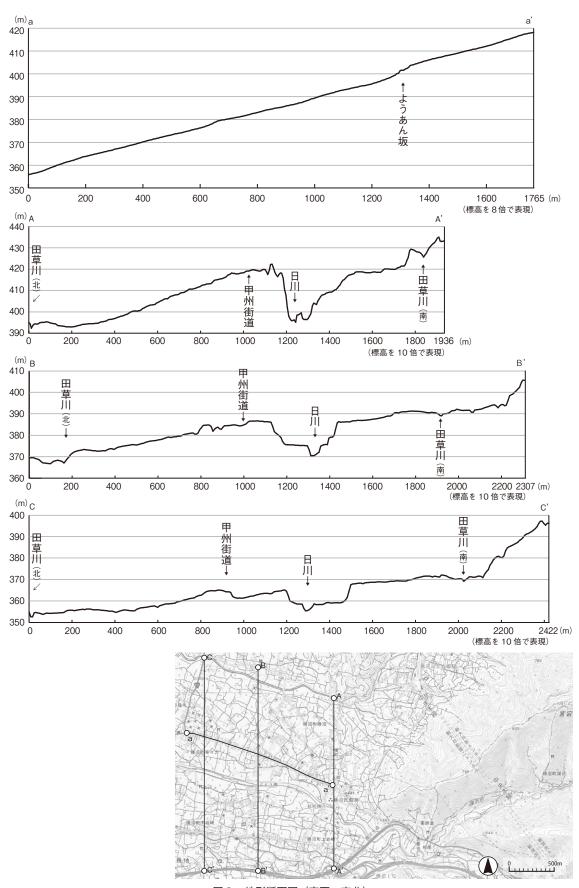


図3 地形断面図(東西・南北)

勝沼氏館を中心とした街路は、地形の変化に呼応し、等高線に直交する形で形成されている。勝沼における東西方向の傾斜を意識した街路形成といえる。他方で、甲州街道はそうした勝沼氏館を中心とした街路とは無関係に、尾根筋を通るように配されている(図4)。これは河岸段丘などの南北方向の起伏・傾斜を意識したものである。

その後、バスなどの交通網の整備やモータリゼーションの進展などに伴い、甲州街道やそこから北に延びる道路などで拡幅工事事業が段階的に 実施され、現在の街路になった。

こうしたなかで、とくに中世の勝沼氏館を中心

に形成された街路は、地域の街区構成・地割などよりミクロなレベルにも大きな影響を与えている。図5から明らかなように、勝沼氏館を中心に同心円状に街区が構成され、また地割もなされている。これらは等高線とも対応するものであり、盆地の斜面を利用した土地利用と考えることができる。

また、近世以降、甲州街道南側に沿って形成された地割は河岸段丘の段丘崖と接しているため、その制約を受けたものとなっている。そのため、仲町など、甲州街道と段丘崖の距離が狭いエリアでは商家町が発達し、西側の距離が広いエリアに

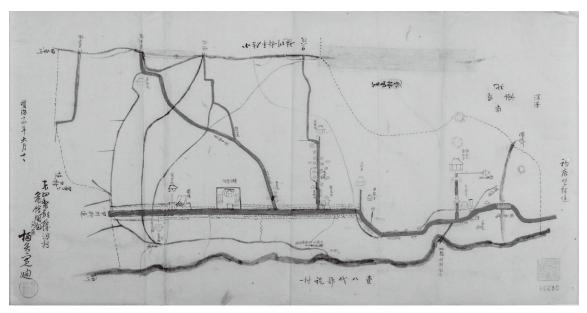


図4 東山梨郡勝沼村略図



図5 勝沼氏館を中心とした同心円状の地割



図6 「宮」のつく小字

なるにつれて、建物の背後にブドウ畑を有し、観 光ブドウ園などが展開している(第3節参照)。

なお、勝沼の雀宮神社(移転前:現在の勝沼中 学校裏)周辺や等々力の諏訪神社周辺には、「宮 前」など「宮」のつく小字名が複数確認できれる (図6)。特に雀宮神社に関してはそうした字名は 多く、宮の前後関係を示す地名でもあることから、 地域の空間認識を考えるうえでも重要である。

このように、勝沼地域は戦国時代の勝沼氏館、また近世の甲州街道、そしてそれに続く商家町という町場的機能のなかで、地形の傾斜・起伏に適応しながら空間構造を決定してきた地域として位置づけることができる。

(2) 岩崎(河岸段丘下を除く)

岩崎は農村的性格が強いエリアである。上岩崎には雨宮勘解由によるブドウ伝説、あるいは、甲斐徳本によるブドウの棚架け栽培などの伝説が伝わる。第4章で言及するように、明治時代以降のワイン醸造も岩崎が中心であり、現在でも日本有数のワイナリーが密集する地域となっている。

岩崎は段丘上部で、南北軸では比較的平坦な地域である。対象地域南部には、段丘崖がもう一段存在する。東西方向については盆地という地形から、西に向けて緩やかに傾斜している。

現在は、「新道」と呼ばれる祝村大道(県道田中勝沼線)が幹線となり、その沿道に多くの家屋、

あるいはワイナリーが並び、集落景観を形成しているが、明治時代頃までは岩崎地域の北側の旧道 (鎌倉道及びその支道)が主要な道であった。旧 道が配され、その沿道には金剛寺・専福寺・正宗 寺などの寺院が立地している。また、上岩崎の雨 宮家、岩崎にある石造物 (道祖神、馬頭観音など) の多くも旧道沿いに位置する (図7)。図からも 明らかなように、こうした旧道は直線的ではなく、 畑地のあいだを折れ曲がりながら配されており、 勝沼の諸街路とは異なる様相を呈している。宮光 園もこの旧道沿いに位置する。

他方、新道沿いには製糸業に関連する多くの工場が並び、明治時代にはじまるその活況は戦時中に衰退するまで続いた。戦後は、ワイン醸造が共同醸造から会社組織へと変化するなかで、新道沿いに点在するさまざまなワイナリーが岩崎のみならず、勝沼地域全体のイメージ形成に大きな影響を与え、勝沼地域の戦後の本格的な観光地化の原動力となっていった。

(3) 日川周辺

勝沼と岩崎のあいだに日川が位置する。明治40年(1907)の水害によって、日川の流路は大きく変化した。それゆえ、河川周辺の小字は現流路と無関係に両岸に広がっており、勝沼・岩崎の境界(かつての行政界)も現流路と一致しない。

明治40年(1907)以前の日川の流路及び小字

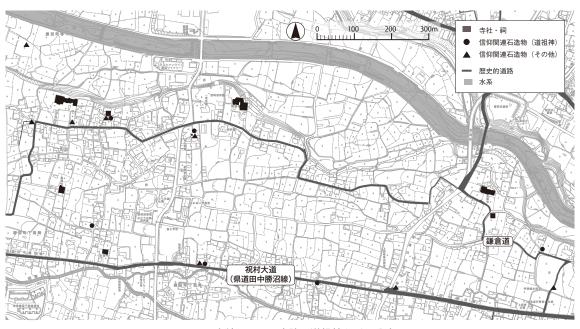


図7 岩崎における寺院と道祖神などの分布

の広がりは、和紙公図(旧土地台帳附属地図/甲州市所蔵)などからもみてとることができる(図8)。なお、明治期の河川流路の付近(明治期公図に基づく)の低地部では、クボ(窪・久保)のつく小字名が現在も多数みられる。

4. 農地に関する土地利用変遷

勝沼地域を含む峡東地域³⁾ は扇状地ゆえに水はけがよく、水田よりも畑作(特に果樹作・桑作など)に適した地域といえる。したがって、近代以降は、時代の変化に順応しつつ、各地域が果樹・桑などで栽培する作物を選択し、変化させていった。ここでは、こうした変化の様相について、大日本帝國陸地測量部及び国土地理院による旧版地図を中心とした諸史料から検討する。

(1) 近世

近世以前の勝沼地域の土地利用を示す史料は極めて少なく、その実態は断片的にしか把握することができない。したがって、限られた史料からではあるものの、近世における勝沼の土地利用は以下のとおり理解できる。

村レベルで近世の土地利用がわかる史料として、甲斐国志草稿本及び編集諸資料(内藤家文書)における御改村方絵図がある⁴⁾。非公開史料のため未実見ではあるものの、山梨県が作成した目録(山梨県教育委員会 1973)によれば、勝沼地域では上岩崎村、下岩崎村、勝沼村、等々力村、菱山村のものが作成されている。このうち、上岩崎村

絵図、下岩崎村絵図については、「山梨の歴史と 文化の道」調査事業に関する報告書(山梨県教育 委員会 1988)に図版として掲載されており、得 られる情報は限られるものの写真により確認する ことができる。

上岩崎村絵図では、農地としての土地利用が「畑場」「田場」「葡萄畑場」として文字で表現され、下岩崎村絵図では「田」「畑場」という文字が記されるとともに、「田」の範囲については彩色がなされ、塗り分けられている(図9、10)。そこでの記載ではブドウ畑は上岩崎東側に集中して分布している。上岩崎東側は扇状地の土砂堆積地であることから水はけがよく、そうした場所でブドウ栽培がおこなわれていたことは注目される。他方、上岩崎西側及び下岩崎の下位段丘面には田、上位段丘面には畑が広がっており、岩崎の多くの農地は田や果樹以外の畑地であった。

なお、こうした岩崎における江戸時代中期から 後期頃のブドウ畑の広がりは、正徳年間(1711 ~1716)の検地によるブドウ畑の分布域(図 11:小字レベルでの把握)と大きく違わない。

(2) 近現代

近代以降の土地利用変遷は、国レベルでは近代の殖産興業政策という歴史的文脈のなかで、また、地域レベルでは扇状地という土地条件のなかで、最適な栽培品種の追求と選択がおこなわれることで規定されていった。その実態は、日本帝國陸地測量部及び国土地理院による旧版地図(1:20,000、1:25,000)により把握が可能である。1:25,000 地形

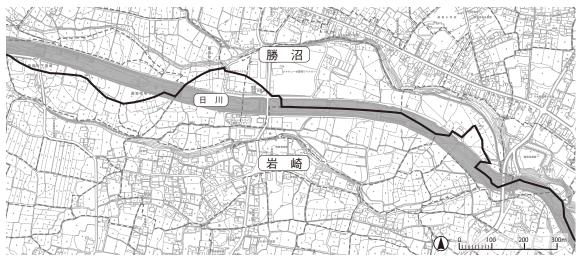


図8 日川の現流路と小字界

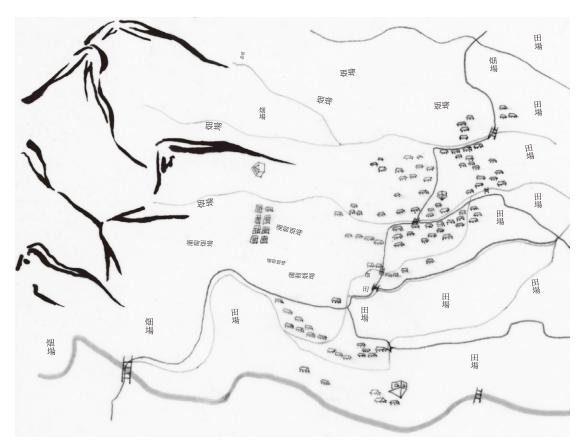


図9 上岩崎村絵図(トレース/絵図上部が南方向を示す)

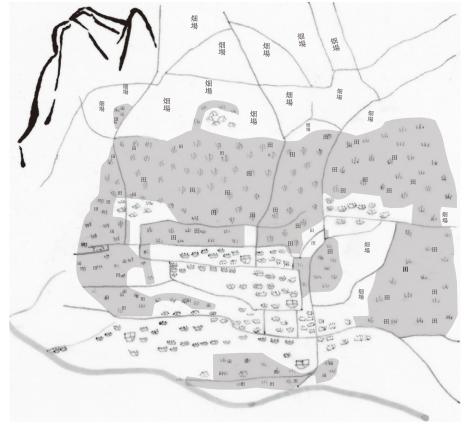


図 10 下岩崎村絵図(トレース/絵図上部が南方向を示す)

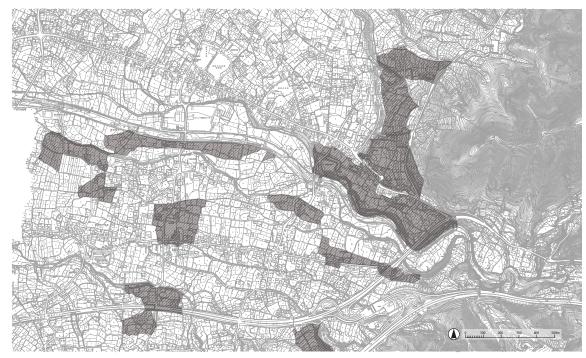


図 11 正徳検地帳にみるブドウ畑の分布

図の場合、勝沼地域は「塩山(鹽山)」及び「石和」の図郭が該当し、表1のとおり1:20,000 地形図が明治21年(1888) に、1:25,000 地形図が明治44年(1911)より現在まで刊行されている。

こうした地形図のなかから、改測がおこなわれた時期を踏まえて、明治21年(1888)頃/明治44年(1911)頃/昭和4年(1929)頃/昭和29年(1954)頃/昭和45年(1970)頃/平成29年(2017)頃(調査時点)の5時期のものを選択し、地図記号に基づき「田」・「畑」・「果樹園」の土地利用を色分けすることで、その変遷を分析する(図12・13)。

明治22年(1889)には、ブドウ畑は、近世から続く地区に加え、上岩崎の南側や甲州街道一帯にかけて分布している。ただし、勝沼地域及びその周辺を俯瞰すると、部分的にブドウ畑、桑畑が広がっているが、多くは水田が占めている。

明治44年(1911)には、山側の斜面地、甲州街道北側一帯、田草川の北側一帯(小佐手など)に桑畑が拡大した。また、南部の斜面地には桑畑とともに果樹園も広がった⁵⁾。明治36年(1903)に新宿-甲府間の中央本線開通により流通インフラの整備が進んだ時期にあたる。なお、殖産興業政策の展開などに伴う桑葉の需要拡大によって、斜面地の開墾や水田から桑畑への転作が進んだ

が、明治 45 年(1912) 4 月 30 日付の山梨日日新聞によれば、その 3 分の 1 以上は他町村に出荷されたようである 6 。勝沼地域では、養蚕農家はそれほど増加しなかったのである。

昭和9年(1934)になると、勝沼・岩崎一帯では果樹園が急速に拡大している。他方で、周縁部(菱山、小佐手、等々力)では桑畑が広がる。いずれも、水田からの転作⁷⁾、あるいは新規開墾などによるものである。これにより、勝沼、岩崎とその周辺部で、果樹栽培と桑栽培(養蚕)の二極化が進行することとなる。これは、本節で前述したように、戦前の岩崎では製糸業が非常に盛んであったものの、戦中には大きく衰退し、地域の産業の中心が醸造などへと転じていったというヒアリング内容とも一致する。そして、それは、明治期の殖産興業政策によって急速に拡大した桑栽培(養蚕業)とブドウ栽培について、地域ごとに異なる選択をおこなった結果として理解できる。

そして、戦後になると、昭和初期に桑畑を中心とした地域も養蚕からブドウへと転換し、果樹園で占められるようになる。こうした転換とブドウ栽培の進展は、既設園の収入増加による拡張のほか、昭和26年(1951)の雹害に伴う資金導入による新植増加、また、昭和29年(1954)に東山梨郡勝沼町、菱山村、東雲村、東八代郡祝村の4

町村が合併したことによって行政施策の強化もおこなわれるなど、複合的な要因によるものと考えられる $^{8)}$ 。

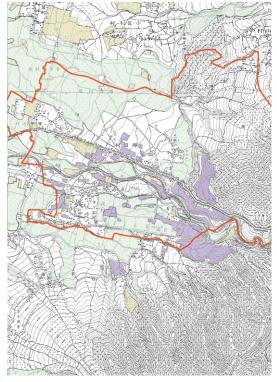
この流れを受けて、昭和48年(1973)の地形 図では、桑畑は完全に姿を消し、果樹園のみになっ た。したがって、現在の視覚的対象としての景観は、戦後から1970年代に形成されたといえる。

なお、昭和50年(1975)と平成27年(2015) の空中写真(図14・15)を比較すると、ビニー ルハウスの出現が確認できる(畑の地割の中にい

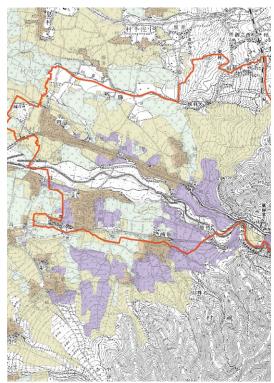
表 1	分析対象	٧	1, 5-	旧版地図

	図名	測量年	更新 履歴	発行年	縮尺	国土地理院 リスト番号	備考		
明治 21 年頃	勝沼	明治21年(1888)	測量	明治24年(1891)	1:20000	_	山梨県立図書館所蔵		
	七里村	明治 21 年(1888)	測量	明治 24 年(1891)	1:20000	_	山梨県立図書館所蔵		
	石和	明治 21 年(1888)	測量	明治24年(1891)	1:20000	_	山梨県立図書館所蔵		
	八幡村	明治 41 年(1908)	鉄補	明治 43 年(1910)	1:20000	s1982	*		
明治 44 年頃	塩山	明治44年(1911)	修正	大正 6年 (1917)	1:25000	84-6-2-1	図名「鹽山」		
	石和	明治44年(1911)	修正	大正 6年 (1917)	1:25000	84-7-1-1			
昭和4年頃	塩山	昭和 4年 (1929)	二修	昭和 8年 (1933)	1:25000	84-6-2-2			
	石和	昭和 4年 (1929)	二修	昭和 8年 (1933)	1:25000	84-7-1-2			
昭和 29 年頃	塩山	昭和29年(1954)	三修	昭和 31 年(1956)	1:25000	84-6-2-4B			
	石和	昭和29年(1954)	三修	昭和 31 年(1956)	1:25000	84-7-1-5B			
昭和 45 年頃	塩山	昭和 48 年(1973)	改測	昭和 50 年(1975)	1:25000	84-6-2-6			
	石和	昭和 45 年(1970)	改測	昭和 48 年(1973)	1:25000	84-7-1-6			
平成 29 年頃	塩山	平成 29 年(2017)	調製	平成 29 年 (2017)	1:25000	_			
	石和	平成 29 年(2017)	調製	平成 29 年(2017)	1:25000	<u> </u>			

※明治 21 年(1888)の当該図郭の刊行を確認できなかった。そのため、本図は鉄道補遺による更新のため、その他の内容は明治 21 年段 階の資料とみなして分析をおこなった。



(a) 明治 21 年(1888)頃



(b) 明治 44 年(1911)頃



図 12 勝沼地域における土地利用変遷(水田・桑畑・果樹園)(1)

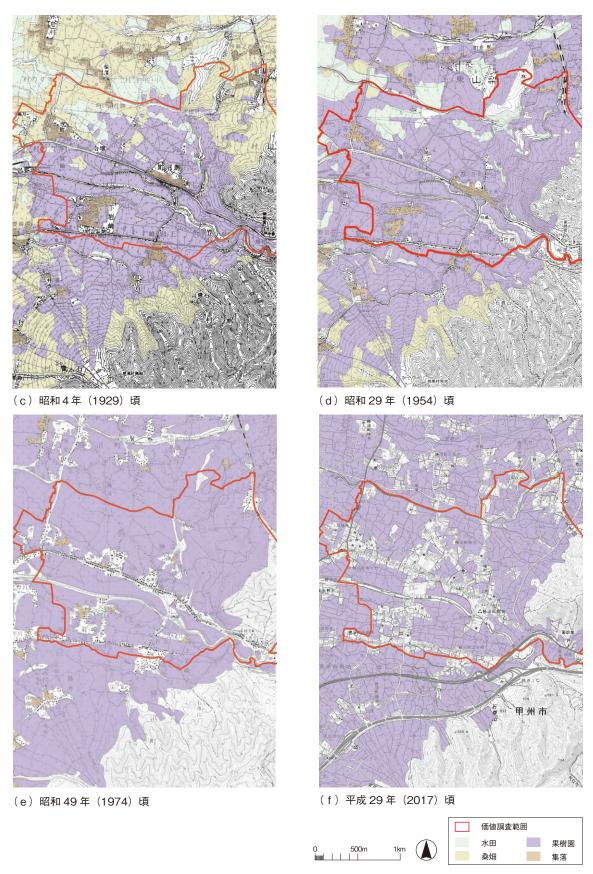


図 13 勝沼地域における土地利用変遷(水田・桑畑・果樹園)(2)

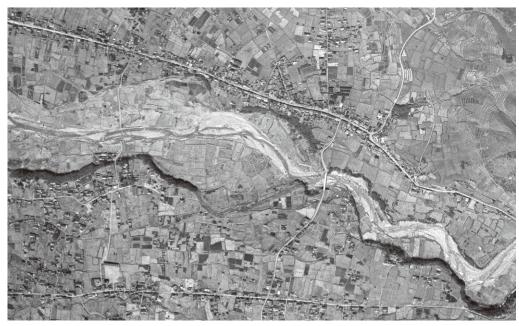


図 14 日川周辺の土地利用(昭和 50年(1975))

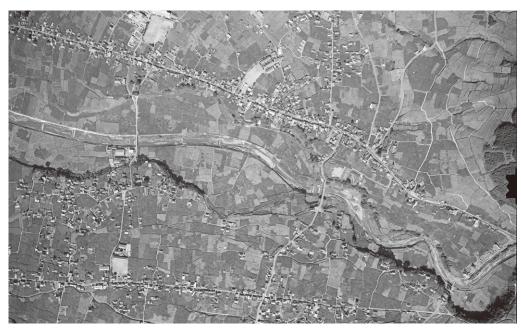


図 15 日川周辺の土地利用(平成 27 年(2015))

くつかの筋が入っている場所)。土地利用は変わらないものの、農業施設の変化は需給等の変化を踏まえて短いスパンで生じる。

(3) 地目の整理:農地を中心に

旧版地図の分析と合わせて、明治期と現在の地 目変化についても検討する。

まず、調査対象地域の土地利用について現況の 地目を図16に示す。地域一帯において甲州街道 沿いや山地部などを除き、農地の地目が多くを占 めている。そして、そのほぼすべてが「畑」となっ ている。こうした地目分布は、ほとんどがブドウ畑となっている現況とも対応している。

また、甲州街道沿いでは、街道に面した土地は「宅地」となっているのに対し、その背後にも土地が延びている場合には背後の土地は「畑」となっていることも特徴的である。後節にて言及されるように甲州街道沿いで地形条件として背後にも土地が広がる土地は観光ブドウ園が営まれているケースが多く、背後にブドウ畑を有している。他方で、敷地背後が日川の河岸段丘の段丘崖となっ

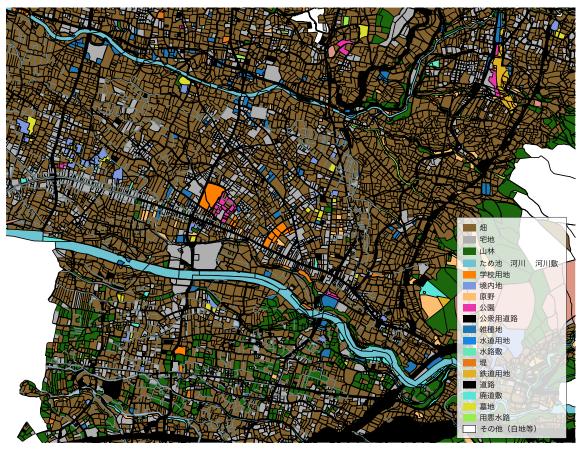


図 16 現況の地目

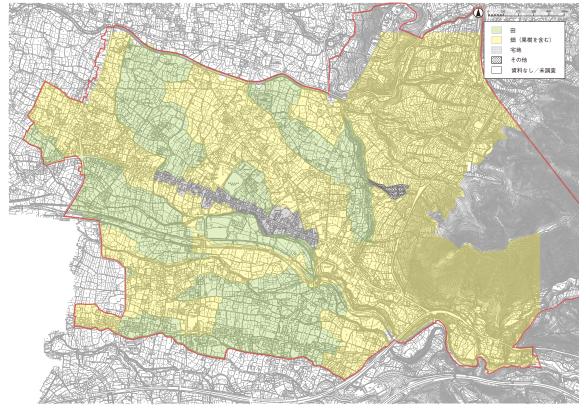


図 17 明治期の和紙公図における地目(田・畑地)

ている土地は宅地のみで完結している。こうした 土地利用の特徴が、地目構成にもよく表れている ことが指摘できる。

他方で、明治期の土地利用については、和紙公図に記された地目をもとに分析した。「田」「畑」「宅地」が多くみられ、一部に「山林」「御料地」などが確認できる。「田」「畑」は分布域が明確に異なり、ひとつの小字のなかに両地目が存在する場合でも、分布域は混在せずに、群をなして分かれている⁹⁾。そこで、ここでは農地の傾向を把握するため、「田」「畑」の地目について、小字ごとに優勢な地目をもとに塗り分け、分布の特性を整理した(図17)。「宅地」「山地」などについては検討の対象とはしていない¹⁰⁾。また、「田」「畑」の面積がほぼ均衡する場合は、おおよその分布に基づき小字の範囲を半分ずつに塗り分けた。

本図より、明治期の地目では盆地縁辺の山地部 (斜面地)では、「畑」の地目が優勢であることが 指摘できる。また、上岩崎の東側から鳥居平にかけての範囲など、正徳4年~6年 (1716~1716)の検地帳においてブドウ畑が確認できる地区では、継続して地目が「畑」となっている箇所が多い。それ以外のでは、「田」の地目も広く分布している。「田」の分布範囲について、明治期の水路 (セギを含む)網(第2節図23)と比較すると、セギが密な地域と対応することが読み取れる。セギの広がりは、斜面地形の利用や河川からの取水箇所などとも関係していると考えられることから、「田」と「セギ」、またその背後にある扇状地・盆地における斜面地形の利用がセットとなっていると理解できる。

日川周辺では旧河道付近も含めた多くの小字で 「田」が分布している。

なお、旧版地図を踏まえると、こうした「田」と「畑」の分布は大正〜昭和初期に大きく変化し、多くが畑地(桑畑・ブドウ畑)に転作されることとなる。

5. まとめ

本節では、勝沼地域の土地利用について、その 歴史的な変遷とともに検討してきた。

勝沼地域の空間構造は、日川を中心とし、扇状

地における複雑な地形に大きく規定されてきた。 そして、空間的な機能分化、つまり町場的機能の 強い勝沼と農村的機能をもった岩崎の二極的構造 とその関係性によって形成され、外部の影響も強 く受けた生活・生業などの基盤変化のなかで空間 も変化してきたといえる。

農地についても、近世における水田を中心とした時代から近現代における桑、あるいはブドウへと至る変化は、土地に適した作物の追求、また、時代の要請のなかで、地区ごとにさまざまな変化をみせ、展開していった。そうしたなかで、鳥居平周辺・上岩崎は近世以降一貫してブドウ栽培を継続している点で特筆される。

以上のように、勝沼地域の空間構造は、時代に 応じて急速に変化を続けるといった側面と歴史的 に持続する側面の両面をもちあわせている点で特 筆される。 (菊地淑人)

註

- 1) 傾斜量を赤色の彩度で、尾根谷度を明度にして示した地図。
- 2) 昭和 29 年 (1954) に合併するまで、勝沼及び菱山は旧東山梨郡の 町村 (勝沼町、菱山村)、岩崎は旧東八代郡の村 (祝村) であり、行政 区画としても異なる郡に属していた。
- 3) 現在の山梨市、笛吹市、甲州市にあたる地域。現在、山梨県を代表す るブドウ、モモなどの果樹作となっている。
- 4)『甲斐国志』は、甲府勤番であった松平定能の編纂により文化11年 (1814年)に成立した地誌である。家臣のひとりであった内藤清石衛 門もその編纂にあたり、編纂のために作成した史料が内藤家文書とし て残されている。
- 5) 明治33年(1900)までの地形図では「ブドウ畑」を示す地図記号が存在しているが、明治44年以降、「果樹園」で統一されている。なお、統計データなどを踏まえると、勝沼地域における「果樹園」の表記は実際にはブドウ畑であることが多いと考えることが妥当であろう。
- 6) 勝沼町誌刊行委員会編(1962)『勝沼町誌』勝沼町、p.574。
- 7) 果樹園は勝沼、岩崎を中心に一部で桑畑からの転作もおこなわれている。
- 8) 前掲註6文献、p.733。
- 9)「宅地」の地目については「田」「畑」と混在して分布している。
- 10) 小字内に「宅地」「山地」しか存在しない場合は塗り分けをおこなっていない。

参考文献

山梨県教育委員会 (1973)『「甲斐国志草稿本及び編集諸資料」調査報告書』 山梨県教育委員会 (1988)『鎌倉道』山梨県歴史の道調査報告書第18集